

SSKR

2022.6.No.405

障害児を普通学校へ

Japan Alliance for Inclusive Education

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 6-8-7 楽多ビル 3 F

<http://www.zenkokuren.com>

郵便振替口座 00180-0-73366 年会費 4 千円



【障害のある子の就学・入級など相談受付中！】

TEL 03-5313-7832、FAX 03-5313-8052

メール info@zenkokuren.com

電話の時間は
巻末の事務局カレンダーを参照

二〇二二年六月七日発行SSKR通巻第九五二一号「障害児を普通学校へ」No.405
一九九二年四月一七日第三種郵便物認可（毎月三回七の日発行）

子どもたちの目の輝きを！

新潟県・世話人 まゆずみただし

佐渡に来て25年経った。ボクが住むのは、三方が峠やトンネル、前は海。高齢化は進み子どもは減る一方。というか、ほとんどいない。限界集落と言われたのは昔のこと。学校も他地区との合併ができず、小中が一緒に20名弱。ウチ7、8名は区域外（島外からも）からの「いわゆる山村留学」の子どもたち。都会の学校には「なじめず」わけありの子どもたちが多い。

先日、空家が増え、ゴーストタウンのようになった集落のメインストリートを、かっこ良い自転車に乗った親子連れがさっそうと風を切って散歩をしていた。夏のように暑い日、まだ5月だというのに、川遊びをしている家族。魚釣りが好きだと、毎日、突堤にアジ釣りに来ている子。そんな子どもは、みんな都会からの山村留学の子どもたちだ。ボク等が子どもだった5、60年前の光景だ。生き生きとして、目がキラキラと輝いている。

3年前に日教組の教研集会に参加してビックリした。あまりにも多くの子どもたちが「発達障害」というレッテルを貼られていることである。そう言えば、ボクの5人の孫たちもみんな学校側に言わせると問題があるらしい。ポヨヨンとしていたり、元気があり過ぎたりはしているが、最近の子どもにない個性的な良い子なのだ。夏休みや冬休みなど子どもたちだけで1、2週間、遊びに来るのだが、一緒に海に行ったり、雪あそびをしたりと、ノビノビと育っていると思うのだが、学校にはあわないらしい。あの子などは、あの子は放っておいたら将来、犯罪者になる。精神科に連れて行くように

と言われたと言う。

昔、ボク等が子どもの頃にも、あいつは乱暴だ、アブナイ、変わっていると言われている子どもたちは確かにいた。そういうヤツとは、避けたり、距離をおいて付き合ってきた。中には、その変わったところがおもしろいと言って付き合っていたヤツもいた。子ども集団の中で、適度に調整していた気がする。ギクシヤクとしたり、親が介入することもあったが、たいがいのことは、子ども集団の中で解決した。

子どもを取りまく環境は大きく変化した。核家族化、少子化により親も子も孤立化した。女性の社会参加と言えば聞こえはいいが、実は共働きをしなければ暮らしていけない。昔、子どもは放っておかれて群れて遊んだが、最近はゲーム機をあずけられ一人で遊ぶ。何よりも学校の変化が大きい。先生が子どもと遊ばなくなつた。約束、キマリ、規則と管理がきつくなり、ケガや事故をおこさないようにと、あれもダメ、これもダメ。それでいて、先生自身も評価だ記録だと管理されている。管理からハミ出す子、ついていけない子、反抗する子が、病氣・異常として「発達障害」のレッテルが貼られていく。

そもそも、「発達障害」などという病氣は無いのだ。昔は、母子関係や人間関係の問題があるとされ、家族やまわりの人がふりまわされたこともある。微細脳損傷、学習障害と言われ検査では見つからない、脳にキズがあるのだろうかと思われたこともある。注意欠陥多動性障害や広汎性発達障害といったところで、症状を羅列しただけのこと。CT・MRI・PET等々、検査機械が進

歩（？）するたびに、脳の血流・神経伝達物質の異常ではないだろうか、とエライ「専門家」の先生でああでもない、こうでもない議論されるが、みんな仮説でしかない。

学校の先生は、自分の手におえなくなるとすぐに「専門のセンセイ」の所に相談に行くように、そして薬を飲ませるようにと言う。何が原因か、どんな病氣かもわからないで、「薬」である。とりあえず、大人（学校の先生や親）にとって都合の悪い症状をおさえることになる。脳の活動をおさえたり、刺激性を高める薬が出されることが多い。

子どもが、そのような行動をとるのは、それなりの理由があつてのことなのだろう。それを薬でコントロールしてしまおう、コントロールできる、という発想が怖い。効いたら効いたで恐いし、効かなかつたら飲む必要は無い。たとえ、問題行動があつたにしても、ああでもない、こうでもないと言いつつ苦勞しながら人間関係を築いていくその過程が、長い目で見た時には大切なのだと思う。

それに薬を考えるうえで、大切だなど思うのは、発育途上の子どもだということ。一人ひとり子どもは異なるし、かかわり方のちがいが、その人の個性を作っていく。

ボクが出会ったあの子どもたちが、目の輝きを失わないように、祈りつつ、関わっていききたい。

